

Jalan Jalan インドネシア

第57回「時々無性に食べたくなる吉野家の牛丼、持ち帰りどうぞ」

イスラム教のラマダン（断食月）に加えてコロナウイルス感染防止対策の大規模社会制限（PSBB）で外食もままならない、というか外食はほぼ不可能な状況のジャカルタでは2人乗りが禁止されたバイクタクシーのゴジェックなどによる配達業務が結構繁盛している。

そのバイクに食事のテイクアウト（持ち帰り、宅配）を頼むサービスは多くのレストランやファストフード店でも実施しており、一度ならず利用された人からほぼ毎日利用している人まで様々だろう。

そんな中、日本人にとってはたまにはあるが無性に食べたくなる日本のものというのが誰しもあるだろう。全員がとはもちろん言わないが過半数以上の人に賛同をしてもらえそうな懐かしい日本の味として「吉野家の牛丼」がある、と筆者は大した根拠はないが感覚的に思っている。

牛丼大嫌い、吉野家は嫌い、という方（いて当然）は今回だけは読み飛ばしてほしい。

別用でジャカルタ中心部の大型ショッピング・モールである「グランド・インドネシア」に行った。大半の店舗は閉店中だったが、訪れる客数より圧倒的に人数が多い警備員に聞けば「いくつかのレストランは営業中だが全て持ち帰り。確か吉野家も営業中だ」との耳より情報というか、こちらを日本人と判断してのサービスに感動して、大半の照明が落とされて暗く、静まり返ったモールの中を進んだ。



薄暗いモール内で一段と目立つお馴染みの看板

お馴染みのオレンジ入りの看板が遠くからわかった「YOSHINOYA」は間違いなく営業中だった。店内での飲食が禁じられているため、用意されているのは注文カウンター前の壁にそった待つための椅子で、持ち帰る客、宅配業者たちは注文を終えるとここで待機することになる。

といっても待ち時間は短く、あっという間に出来上がってきた。ここで注意。紅ショウガが好きな人はお願いしないと通常の持ち帰りにはついてこない。特に店員に頼めば何個でも紅しょうがはついてくる。

牛丼2つに飲み物2個、揚げシュウマイ2人分（4個）、味噌スープ2杯、デザートのゼリー2個、これで占めて10万9000ルピアというお得メニューがお薦めである、牛丼はオリジナルか焼肉から選択できる。

このほかに1日の断食が終わったブカ・プアサように軽い「鶏肉パッケージ」も用意されている。こちらは1人前（鶏肉ロール3個、白ご飯、ジャワティーのボトル）が3人分で4万5000ルピアとなっている。

宅配を希望する人は個別の吉野家ではなく、配送センターのようなところに電話かWhatsAppで連絡し、注文、連絡先、配達先の住所などの情報を送れば、吉野家が近い店から届けてくれるシステムになっている。配達業者の輸送料込みの料金が提示されるので、商品と引き換えで払えばそれでOKである。

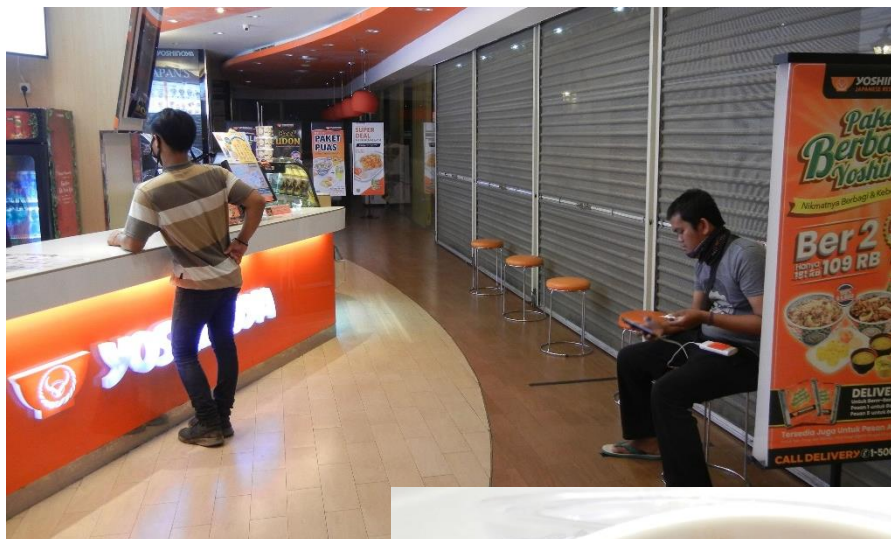


見慣れたメニュー（上）

忙しく注文をさばく店員たち（右）



PSBB の影響で食品や総菜の宅配が盛んになり、こうした配達文化、システムが格段に充実しているような気がする。それはそれで自宅待機、自宅ワークの人たちにとってはうれしいことではあるが、ざわざわした中で友人たちとおしゃべりしながら、紅ショウガと唐辛子を山のように盛った牛丼をかきこむのもまたいいものであり、そうした日の再来を心待ちにしている。



待っている客は宅配の業者が
ほとんど (上)
無性に恋しくなる日本の味
(右)
お得なパッケージメニューも
豊富 (下)

